

## 山上の備え

[聖書] 創世記 22 章 1～19 節

これらのことの後で、神はアブラハムを試された。神が、「アブラハムよ」と呼びかけ、彼が、「はい」と答えると、神は命じられた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい。」次の朝早く、アブラハムはろばに鞍を置き、献げ物に用いる薪を割り、二人の若者と息子イサクを連れ、神の命じられた所に向かって行った。三日目になって、アブラハムが目を凝らすと、遠くにその場所が見えたので、アブラハムは若者に言った。「お前たちは、ろばと一緒にここで待っていてなさい。わたしと息子はあそこへ行って、礼拝をして、また戻ってくる。」アブラハムは、焼き尽くす献げ物に用いる薪を取って、息子イサクに背負わせ、自分は火と刃物を手に持った。二人は一緒に歩いて行った。イサクは父アブラハムに、「わたしのお父さん」と呼びかけた。彼が、「ここにいる。わたしの子よ」と答えると、イサクは言った。「火と薪はここにありますが、焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいるのですか。」アブラハムは答えた。「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる。」二人は一緒に歩いて行った。神が命じられた場所に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せた。そしてアブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。そのとき、天から主の御使いが、「アブラハム、アブラハム」と呼びかけた。彼が、「はい」と答えると、御使いは言った。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった。」

アブラハムは目を凝らして見回した。すると、後ろの木の茂みに一匹の雄羊が角をとられていた。アブラハムは行ってその雄羊を捕まえ、息子の代わりに焼き尽くす献げ物としてささげた。アブラハムはその場所をヤーウェ・イルエ（主は備えてくださる）と名付けた。そこで、人々は今日でも「主の山に、備えあり（イエラエ）」と言っている。主の御使いは、再び天からアブラハムに呼びかけた。御使いは言った。「わたしは自らにかけて誓う、と主は言われる。あなたがこの事を行い、自分の独り子である息子すら惜しまなかったのだから、あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう。あなたの子孫は敵の城門を勝ち取る。地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。」アブラハムは若者のいるところへ戻り、共にベエル・シェバへ向かった。アブラハムはベエル・シェバに住んだ。

### [序] 新しい名前

アブラハムは初め「アブラム」（尊敬すべき父）という名前でした。彼は75才になって、神さまからお召しを受けて、老いた父の住む町、親類・友人から離れ、自分の家族だけで、落着く先もはっきりしない未知の地へ出立しました。彼は神さまから、「地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る。」という約束と役目をいただいて、新しい人生を歩み始めたのです。しかしこれは交通・通信の便の悪い4000年前の世界では、大変な決断だったに違いありません。

そして99才になり神さまから新しい名前「アブラハム」(多くの国民の父)を頂きました。75才から24年かけて「人々から尊敬される父」が「多くの国民の父」へと変えられていき、神さまから新しい名前を頂いたのです。何という素晴らしい人でしょうか。「年をとったからもうダメだ」などと言わせないすごさです。さて、私たちは如何でしょうか。

## [1] 神の残酷な命令

こうしてアブラハムは新しい名前と共に、人生の完成期に入りました。すると正妻サラとの間に、待望の息子イサクが誕生しました。「100才と90才の夫婦に子供が生まれるなど、そんな事がありうるだろうか！！」と誰でも思います。当人たちですら、その予告を神さまから聞かされて、つい笑ってしまっています。だから与えられた子をイサク(笑う者)と命名したほどです。

確かに神さまは真実なお方です。約束を必ず果たして下さるお方です。「あなたの子孫を、大地の砂粒のようにする」とアブラハムに繰り返し約束されました。でも跡取り息子はなかなか与えられません。10年過ぎました。遂にサラの側女ハガルによって跡取り息子を得ることにしてしまいました。しかしそれは神さまの御心ではありませんでした。それから更に15年経ってから、やっと約束が実現されたのです。それにしても、75才から100才まで25年もの間、神さまの約束を聞き続けて生きてとは、すごいことです。

ところがイサクが成長して少年になると、神さまからアブラハムに大変な命令が下りました。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい」(22:2)。我が子を丸焼きにして献げよと親にお命じになるとは、何と残酷な話でしょうか。もしも私たちがこのように求められたら、そんな神さまにはとてもついて行けない！と、誰しもが思うに決まっています。これは一体どうしたことなのでしょうか。

ところがアブラハムは、神さまに静かに聞き従ったのです。次の朝早くロバに鞍を置き、薪を用意して、二人の若者とイサクを連れて、神さまが命じられた所に向かって行きました。そして三日目に遠くにその場所が見える所に達すると、アブラハムは若者に言いました。「お前たちは、ろばと一緒にここで待っていなさい。わたしと息子はあそこへ行って、礼拝をして、また戻ってくる。」

そして薪をイサクに背負わせ、自分は火と刃物を手に持って、長い道のりを登って行きました。そして神が命じられた場所に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べ息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せました。そして刃物をとり息子イサクを屠ろうとしました。その時天から主の御使いの声が響いてきたのです。

「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることが惜しまなかった」。アブラハムが目を凝らして見回すと、後ろの木の茂みに一匹の雄羊が角をとられていました。アブラハムはその雄羊を捕まえ、息子の代わりに焼き尽くす献げ物として、ささげたのです。

## [2] 信仰の危機

繰り返して申します。100 才にしてやっと与えられた独り息子を、丸焼きにして献げよとは、何と残酷な言葉でしょうか。神さまは、どうしてこのような 命令をアブラハムになさったのでしょうか。この疑問を解く鍵として、私は二つの言葉に注目します。

第一の鍵は 22:1 です。「これらのことの後で、神はアブラハムを試された」。これらのこととは、創世記 11 章 27 節以下のアブラハムの記事全部でしょうが、とりあえずは、直前の 21 章に記されている三つの出来事でもよいと思います。

- (1) 先ずイサクがやっと誕生しました。そして乳離れの日に盛大な宴会を開きました。これは日本でいうと七五三の祝です。昔は赤ん坊のうちに死ぬ子が沢山いました。そこでやっと三才になった。有難うございます。どうか五才、七才になれますようにとお祝いします。そして無事に五才、七才になれた。もう大丈夫だと喜び感謝したのです。イサクはアブラハム 100 才・サラ90才の子ですから、果たして丈夫に育つだろうかと、皆が心配したに違いありません。
- (2) 次にハガルとイシマエル母子を家から追放してしまったことです。サラは 側女のハガルに産ませたイシマエルがイサクの将来の邪魔になると不安になったからです。この手前勝手な罪深さについては、先週お話ししました。
- (3) ゲラルの王アビメレクとアブラハムが友好協定を結びました。20 章によるとアビメレクは大変強力な支配者だったようで、アブラハムはサラを妹だと言って自分が殺されないように身を守ろうとしたほどでした。この恐るべきアビメレクがアブラハムの生活を見て、神さまが共にいてくださる人だと尊敬するようになり、お互いに仲良く暮らしていこうと協定を結んでくれたのです。よそ者のアブラハムがゲラルの地で社会的地位を認められたのです。そこで彼は、ペリシテの国に長い間安心して寄留することができました。

以上が 21 章の三つの出来事です。跡取り息子が順調に成長してくれるし、イシマエルを追放したので、家督相続をめぐる争いの心配もなくなりました。ゲラルの社会でも認められて地位も確立しました。アブラハムの生活が家庭的にも社会的にも安定したのです。

ある人が「人生の二番目に良いことが、一番良いことを呑み込んでしまう」と言っています。アブラハムは、「イサク」「イサク」と愛しているうちに、もう一人の息子イシマエルを切り捨ててしまう手前勝手な罪を犯してしまいました。こんな心がけでは「地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る」という神さまから与えられた使命を果たせません。

また自分の土地を持たず、家を建てず、旅人として天にあるもっと良い故郷を目指す生き方に徹しようとしてきたはずなのに(ヘブライ 11:10、16)、寄留地のゲラルに安住しようとして妻のサラを妹だと誤魔化し、王のアビメレクから「人間として、してはならないことをした」と厳しく非難されています(20:9)。

家庭とか子供とか仕事・地位という良いことに心が傾いていくうちに、自分の使命とか人間の誠実さという基本的に大切な事が呑み込まれてしまって、気がついたら罪に陥ってしまっていたという事になりかねません。そういう意味で、家庭的・社会的に安定したアブラハム・サラ夫婦は、神さまの目からご覧になると、危険な状態、人生の危機を迎えていたのです。

### [3] イサクを献げても失わない

第二の鍵は「焼き尽くす献げ物」(全焼のいけにえ、燔祭)です。これは私たちの罪の贖いと全き献身を表します。ノアは大洪水の後で、先ず祭壇を築いて、焼き尽くす献げ物をささげて礼拝しました。ノアは人々が神さまの警告を無視して洪水の備えを怠り、身を滅ぼしていった恐ろしさを目の当たりに経験しました。そして自分たちの罪を今一度反省し、赦され清められることを祈り求めました。また自分を神さまに献げきってお仕えしていこうとする信仰を表したのです。

神さまは、アブラハムにも同じように、罪を深く悔い改めて、全き献身をもってイサクを育て上げ、アブラハム自身の人生の役割りを果たして、その生涯を完成させようとなさったのです。さすがにアブラハムです。老年の安定した生活の中に身を置きながら、自らの霊的な危機を感じとって居たからこそ、「イサクを献げよ」と命じられた時「来るべきものが来たか」と受取りました。

そして一見残酷に思える神さまのご命令に、自分の罪深さをはっきりと示された思いで、静かに聞き取ることが出来たのではないのでしょうか。そして指示通りに準備を整えて、次の朝早くに、イサクを連れて出立しました。ここが私たちとは違うアブラハムの偉大さだと、私は受け取ります。

イサクに薪を背負わせて山に登っていく途中の親子の簡潔な会話が、読む者の心にしみてきます。「わたしのお父さん」「ここにいる。わたしの子よ」「火と薪はここにありますが、焼き尽くす献げ物にする小羊は、どこにいるのですか」「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊は、きっと神が備えてくださる」

彼は、他でもない神さまに献げるのだから、イサクを失うことにはならないと信じたのです。ですから麓に若者を残してイサクと二人で出立する時、「わたしと息子はあそこへ行って、礼拝をしてまた戻ってくる」と言うことが出来たのです。

そこで新約聖書の信仰はこう受け止めています。「信仰によってアブラハムは試練を受けた時、イサクを献げました。——アブラハムは、神が人を死者の中から生き返らせることも、おできになると信じたのです。それで彼はイサクを返してもらいましたが、それは死者の中から返してもらったも同然です」(ヘブライ人への手紙 11:17~19)。つまり彼は、たとえイサクを屠って献げても、神さまは

死んだ者を復活させることもできる全能の神さまなのだから、イサクも復活させて自分の手に戻してくださるに違いない、と信じていたということです。

事実神さまはこの時から 2000 年後に、このモリヤの山上エルサレムの都の郊外ゴルゴタの丘で、ご自分の独り子イエス・キリストを、十字架におつけになりました。人間の罪がイエスキリストを磔にしたのですが、神さまがその死を、罪を贖い、救いをもたらす死に変えて下さったのです。そのイエス・キリストは三日目に復活して、絶望している弟子たちの信仰を復活させ、天に凱旋されました。キリストの全き献身の死は、永遠の命への復活に通じているのです。

### [結] 愛の神の備え

新約聖書の信仰は、またこのように証しています。「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」(ローマの信徒への手紙5:8)。「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか」(ローマ 8:32)。

このように全能の神さまは、同時に独り子イエス・キリストを十字架に磔にしてまでも、私たちに救おうとして下さる愛の神さまです。その神さまが愛の備えを用意して、アブラハムをモリヤの山上に導かれたのでした。アブラハムは その場所をヤーウェ・イルエ(主は備えてくださる)と名付けました。「備える」という語は、「見る 分かる 理解する」という語ですから、文字通りに訳すと「主の山の上で神さまが見える」「神さまが分かる」「神さまを理解する」となります。神さまは御子をも惜しまず死に渡される愛をモリヤの山上に備えて、アブラハム を招き、ご自身をはっきりと分からせて下さったのでした。

アブラハムは大切なイサクを連れて、礼拝を捧げようと山に登りました。私たちが今朝このように礼拝に集りました。アブラハムのように、神さまに全幅の信頼を寄せて、自分のイサクを献げて礼拝いたしましょう。そして神さまが山の上に備えて下さって居る豊かな永遠の命の恵みをいただきましょう。神さまへの信仰を新たに山を下り、新しい一週間の歩みを始めましょう。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ福音書 3:16)。

お祈りいたします 神さま、生活が整ってきますと、私たちは、気が付かないうちに、一番大切にしなければならないことを、おろそかにし始めます。その姿を信仰の父アブラハムが現しました。貴方は直ぐに、アブラハムを山に呼び寄せられました。

神さま、私たちが貴方を二番目にして、自分のエゴを第一にし始めた時には、どうぞ厳しく声をおかけください。「イサクを献げよ」と、厳しいお言葉を語りかけてください。そして、貴方の真の恵みをいただける者にしていただきますように。そして、神さまから与えられている役目を果たす者として、人生を全うすることができますよう、お導きください。

今日、愛する澤田さんご夫妻を私たちの群れにお加えくださいました、有難う ございました。共に礼拝を守りつつ、神さまから与えられた賜物を活かして、あなたのご栄光を現していくことができますように、お導きください。

感謝しつつ、イエスキリストの御名によって、お祈りいたします。       アーメン